



会報 86 号等の発送作業（2020.5.17：旧事務局（酒井会長宅）にて）

～～ 時の風 ～～

新型コロナウイルスと実存的オリジナル登山様式

田中 文夫（神奈川県：元・評議員）

中国に発した新型コロナウイルス惨禍は、世界文明を激震させています。

TV では専門家と称する面々が解説し、拙宅の朝日新聞では各界の論客が緒論を展開。今朝（6/27）は、佐伯啓思氏（京大名誉教授）の「死生観への郷愁」が報じられました。

2003 年、本学会設立当初の集まりで、副会長の徳久球雄先生に「文化と文明の違い」を質問しました。しかし回答は得られません。私が本学会へ参加した主要テーマだったからです。しかしその後、これらのテーマは中村純二先生と深く掘り下げ、17 年後の今年 2 月に『複雑学 日本文明物語&哲学』へと収斂しました。そして、文化と文明の違いについては、次なる理解へと至ります。

- ・ 文明＝広域生活技術と規範 ← 普遍性（都市、産業、科学、法典、等）
連続性（アナログ）
- ・ 文化＝特定価値の生活様態 ← 多様性（宗教、思想、文藝、遊び、等）
離散性（デジタル）

では、新型コロナウイルスの特徴は、凝縮すると以下になります。

- ① ウイルス保持者が見えない（透明＝ステルス） ← リスク・マネジメント
- ② 急激な重篤化から死に直結（断絶＝カストロフィ） ← クライシスマネジメント

「死の恐怖」は人間本能をかき立てます。それゆえ佐伯氏の「死生観への郷愁」となり、「人知を超えたものへの怖れを取り戻す（無常）」と仏教観を説いています。

18歳から私が岩壁クライミングにのめり込んだのは、「死の恐怖への対峙」がありました。恐怖を何とか乗り越えた時に感じる実存感、裏返せば「生きていることの喜びと充実感」。この麻薬に侵され、42年前にネパールヒマラヤ「P29 南西壁遭難」を経験。垂直空間千メートル上部からの氷河崩落で吹き飛ばされ、3隊員が死亡し、偶然に私は生きて残された体験です。

その理由を探るべく本を読み漁りましたが、たどり着いたのは物理学の法則、「不確定性原理」でした。「量子の位置は確率的にしか特定できない」という量子物理学から、“偶然な事象は宇宙の必然でもある”という“受容の精神”です。

さらに量子物理学では、宇宙の全エネルギーに占める原子（物質）の量は4.9%程度、とします。原子が集まって分子（物質）となり、光を反射して目に見える。“目に見える事象”とは、“宇宙のたった5%未満な事実”でしかなく、いかに微小であることか、と。

目に見えないコロナウイルス感染が、短日数で「死を招く」ことへの防御（クライスマネジメント）は難しい。目に見えない電気事象の設計を生業としてきた私には、電磁気理論を理解・応用して制御を図ります。新型コロナウイルスの制御も、ウイルスの正体を把握することが基本。しかし喫緊を要する今は、感染症専門家から「3密を避ける」という「遮断制御」が提起されました。成長を肥大化させた現代文明とグローバル経済には痛い、「遮断制御」です。

今、登山やスポーツまでもが商品化され、産業構造の波に飲み込まれています。しかし登山やスポーツの始源は、J.ホイジンガが『ホモ・ルーデンス』で述べたよう、「遊びとしての文化」でした。人々が“集中”することにより消費者化され、産業となったのです。遊びの究極は、自発的創造です！

私達世代は産業化される前の登山者です。それゆえコロナ禍にあっても、山に登ることができます。問題は山でなく、アプローチの公共交通機関における“3密”です。

日本政府は「新しい生活様式」なる言葉を発しています。今日の朝日新聞夕刊では、「コロナ時代の登山スタイル」なる一面記事が載りました。しかし「消費者登山スタイル」の域を出ていません。いずれも言葉だけが躍り、その文化文明的背景が見えません。

旧来の登山者は「衣食住を背負い、自己責任」が当然でした。登山産業の消費者と化した今の登山者にとり、「コロナ遮断」は登山の原点を思い起こす良い機会となります。「遊び」の原点に立ち返り、修験道まで遡らないまでも、「死の恐怖」と対峙して自己を鍛える「実存的オリジナル登山様式」が、私を鍛えてくれた実例の報告としてみました。